

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話：070-1503-6401/044-988-0004

<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>

第 193 号

白井義胤翁
を訪ねて 14

後日談

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

孫たちの世界

1929年(昭和4年)5月、義胤翁は孫の縁組を見ることなく旅立ちました。この連載の第6回に記した翁の3代目作戦の成果を見届けることは出来なかったのです。それでも翁の撒いた種子は確実に育っていました。成人した孫たちは、皆良縁に恵まれました。翁の長男故泰胤氏の長子知胤さんは、大学教育を受けて鉄道省に勤務する官僚の道歩んだのですが、秋田銀行の初代頭取を務めた秋田県の大富豪として知られ、民間出身者の枠で現役の貴族院議員として高名な辻兵吉氏の妹淑子さんを妻に迎えたのです。爵位こそ持ちませんが、華族たちが名を連ねる貴族院議員の一人と縁戚になったのです。この結婚について知胤さんは、母のアサ女と共に義胤翁の墓前に報告し、閨閥の網の目をさらに広げることを誓ったのです。妹たちも良縁に恵まれ、すぐ下の妹登美さんは淡河信行氏に嫁し、三女の登喜さんは糟谷忠四郎氏に嫁したのですが、1909年(明治42年)生まれの四女良子さんは、元勲山縣有朋公爵の孫山縣七郎氏に嫁したのです。山縣公爵は1922年(大正11年)に亡くなられていたのですが、爵位は山縣家に残ります(公爵存命中、長男には伯爵位が、後継者と定まると侯爵位が賦与される欧州方式が取られていました。なお分家は男爵位を付与されます)。義胤翁の孫娘の一人が華族夫人となったのです。後は、後継ぎの嫡孫知胤さんが鉄道省で高位に進み、栄典を何度も積み重ねて爵位を受ければ、全てが完結するのです。その道に水を差したのが日中戦争であり、アジア太平洋戦争でした。戦争ですべてが停止状態となり、敗戦によって華族制度そのものが廃止されてしまったのです。日本国家が明治維新に匹敵するような大きな変革を経験し、日本社会もまた一からやり直すことになったのです。義胤翁の志と大きな夢もまた未完に終わらざるを得なかったのです。

最後に柿生村ではどうだったかを記して、この稿を閉じることに致します。柿生村という村名は、1939年(昭和14年)4月1日の川崎市への編入と同時に消滅したのですが、柿生村意識はその後も長く残りましたので、この稿では、そのまま使わせていただきます。国民学校令が発令された1941年(昭和16年)4月、義胤翁の名を冠した柿生村唯一の高等小学校は、川崎市立柿生国民学校となり、義胤翁の名は校名から消えました。校名変更の際し、柿生村では飯塚重信前村長ら5名の代表を、麻布笄町の本宅に派遣し、義胤翁の嫡孫知胤氏に校名変更のいきさつを丁寧に説明する労を取りました。その上で、柿生村の教育に対する義胤翁の功績を後世に伝えたいと、川崎市長に讃を揮毫していただいた「白井義胤頌徳碑」を建立したのです(実際の建立は、日米開戦のため、戦後になりました)。

小林一夫氏の祖父公胤氏が贈与された下麻生の白井家では、長男の元胤さんが夭折したため、文子、和子、玉子の三姉妹の長女の文子さんが養子を迎えて白井の名跡を継ぎました。和子さんと玉子さんも良縁を得て共に子宝に恵まれました。戦火が激しくなる中、体調を崩した当主の公胤氏は56歳で生涯を閉じました。それから数年、1944年(昭和19年)秋になると、日本各地に米軍機による激しい空爆が続くようになり、婦女子の疎開が奨励されるようになると、和子さんと玉子さんは、子どもを連れて下麻生の実家に疎開してきたのです。柿生村周辺は、東京や横浜からの学童疎開を受け入れていますから、空襲からは安全だと考えられていたのです。母の和子さんに連れられて疎開してきた小林一夫少年は、戦中・戦後の一時期東柿生小学校に通学し、朝倉先生という女子先生の話は良く覚えていと懐かしそうに話してくれました。戦後も三姉妹の交流は長く続いていた事は、拝借した写真からも確認できました。(完)



現在の柿生中学校の一郭に
建つ白井義胤翁頌徳碑



下麻生白井家の三姉妹
左から長女文子、次女和子、三女玉子、
三人仲良く長生きしました。

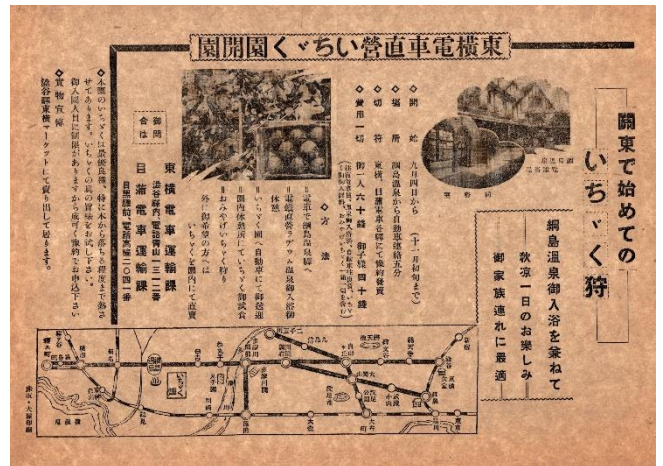
シリーズ
禅寺丸柿の歴史 3

近代における川崎市域及び横浜市北部地域での果樹栽培(3)

相澤雅雄(都筑・橘樹研究会会員)

矢上川流域でのイチジク(無花果)栽培

川崎市域南部の大師河原村や田島村・御幸村では、明治後期から大正期に梨栽培が最盛期を迎えた。併せて、大正 8 年(1919)頃から大師河原村を中心にイチジクを栽培する農家が増え、京浜地区を代表する有力な産地となった。しかし明治末期から川崎市域南部一帯に工場が次々と進出したことにより、六郷川一帯は工場から排出される粉塵などによる公害の影響や栽培地の減少により果樹栽培は不利に追い込まれていった。このためイチジクの産地は、大師河原村付近から矢上川流域の日吉方面へと移っていった。昭和 14 年(1939)頃になると、日吉方面は横浜市を代表するイチジクの産地に成長した。これらの経緯について『昭和十四年版 横浜市農政概要』(横浜市産業部 昭和 15 年)が記しているので、参考まで次に抜粋しておく。



観光チラシ：東京の奥座敷綱島温泉の入浴と関東初のいちじく狩り 筆者蔵

「従前より日吉方面に栽培せられつつあつたものであるが、京浜市場に於ける主要供給地たる川崎市が事変以来工業の勃興により工場地帯として急激に発展し、同市内の無花果栽培地帯が殆んど工場地と化し去ったので産出が著しく減少し、市場の需要に対し供給が之に伴はざる状態である為に、本市日吉方面の無花果栽培地帯が現在京浜市場に於ける唯一の供給地となり、昭和十四年に於ける市況の如き一箱(大果は六個より小果は十六個入)十銭位のものが平均二十五銭前後の高価を示した次第である。無花果は果実の性質上遠距離の輸送がきかず市場としてはどうしても近在に其の産地を持たなければならぬ関係上、本市日吉地方の如き最も地利的に恵まれた産地と云はねばならぬ、当業者に於いても此の点に着目しつつあるもの相当あって、将来の発展は相当見る可きものがあるかと推察される、現在栽培されて居る品種は殆んど「ドーフキン」種で、販売方法は個人出荷が多く京浜市場へ販売されて居る」

イチジクは、明治に入り需要が大きく伸びたが、果肉が柔軟な性質上運搬が困難であり、また貯蔵も難しい果物のため遠距離輸送に不向きであった。どうしても市場価格が高くなる傾向にある。大師河原村が有力な産地となったのは、市場及び消費地に隣接し、土質が栽培に適していたことが幸いした。土質は河川付近で地下水が高い場所が好適とされている。「ドーフキン」は、果実が大きくかつ果肉が柔らかく、甘味に富んでいるため品質が極めて良好な品種とされている(富樫常治著『実験果樹栽培講義』養賢堂 大正 14 年)。

昭和 6 年(1931)に都筑郡中里村(現・青葉区、緑区の一部)の中里村園芸組合は、イチジクの苗木(ドーフキン)3 千本を広島県の種苗業者から購入し、村内でイチジク栽培を始めた。組合長の谷本善吉が率先して村民に普及を図ったことによる。収穫したイチジクは、京浜市場に出荷し大歓迎を受けたという。神田市場では、12 個入一箱の手取りが 25 銭であったと当時の『横浜貿易新報』が報じている。

谷本善吉は、都筑郡下谷本村の出身で、中里村会議員・中里村長・横浜市会議員を務めた自治功労者であった。他に中里養豚組合長・下谷本出荷組合長など組合を組織して農業経営の発展に寄与された。養父は、明治 44 年(1911)に廣田花崖と『甘柿禅寺丸柿栽培法』(有隣堂)を著した谷本眞司である。谷本善吉は、イチジク以外にプラムの栽培にも村民と力を入れていた。昭和 10 年 1 月 1 日付け『横浜貿易新報』に「中里園芸出荷組合 組合長・プラム組合長谷本善吉」と新年賀詞広告をだしている。谷本善吉の自叙伝『人生は修行だ』(私家本、昭和 43 年)によると、他に余蒔胡瓜・余蒔トマト・桃といった栽培にも取り組まれた。同書を読むと「先ず、珍しいもの、新しいものを取入れなくては消費者にうけない」との農業経営に基本的な考えをもち、固定観念にとらわれないスケールの大きい、まさに篤農家であったと言えよう。

(続く)

シリーズ
歴史の中の女性像 10

その 1 ナイチンゲールの世界 (10)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

続クリミア戦争とナイチンゲール

リズ夫人から、フローの手紙を見せられたシドニー・ハーバートは、狂喜しました。彼もまたフローを良く知っていたからです。高い教養を持ち、看護師の訓練も受けている。さらに計数に明るく、組織力にも優れ、社交界の付き合いを通して、政府関係者にも知己が多いときているのですから、フロー以上の人材が、ほかにあるとは思えなかったのです。ハーバートは早速閣僚会議に諮り、フロー・レンス・ナイチンゲールをクリミア戦争に派遣することを決めたのです。

10月18日、フローは、「ミス・ナイチンゲールをトルコ、スクターリのイギリス陸軍附属病院付き看護師監督官に任命する」と記された、辞令を手渡されました。政府の決定は、『タイムズ』など新聞各紙を通じて、すぐにイギリス中に広まりました。傷病兵によろやく看護チームが派遣されるのです。イギリス中がこのニュースを歓迎しました。この報道と世間の歓迎ムードは、ナイチンゲール家の家名に傷をつけると、あれほど激しくフローを非難していた母と姉の態度を転換させる効果を生みました。女性で政府の監督官という高い地位に就いた人など、これまで1人もいなかったからです。「なんと立派な地位について、あなたはナイチンゲール家の誇りです」と、母も姉も喜んだのです。2人と仲直りが出来たことは、フローにとっても喜びでした。

僅か数日間という慌ただしい準備を経て、フロー以下38人の看護スタッフは、スクターリに向け出発しました。10月21日にロンドンを出発した一行が、スクターリに到着したのは11月3日でした。それから2年後の1856年8月7日に帰国するまでの1年9ヶ月が、フローのクリミア戦争での行動期間でした。

クリミア戦争での傷病兵の看護を任務として、フローを監督者として派遣された38名の看護士一行の任地は、上に掲げた辞令にあるクリミア半島ではなく、黒海の対岸トルコのスクターリでした。ハーバート軍務大臣は、戦地の野戦病院ではなく、後方のより規模が大きく、設備も戦地の野戦病院に比べれば多少は良いであろうスクターリの病院で看護にあたって欲しいと考えたのです。しかし、イギリス野戦病院の実態は、大臣が考える以上に劣悪を極めていました。

21世紀を迎えた最近では、多少改善されてきているのですが、20世紀末においてもイギリスは一国二国民と揶揄された程、一部上流階層による下層民への差別が強い国でした。スクターリの病院に収容されている傷病兵のほとんどが、下層階級に属する兵士たちでしたから、病院の環境は劣悪を極めていたのです。そこに『タイムズ』の記事を敵視する戦地の司令官や士官たちの嫌がらせが加わります。どこの国、どの時代にもあることですが、現地の制服組と本国の背広組との仲違いが加わります。フローたち一行は、現地スタッフの妨害で、最初の1週間は掃除婦まがいの仕事しかできなかったのです。不平を言う看護師たちをフローはなだめました。「待ちましょ。間もなく人手は足りなくなります。今のうちには包帯や雑巾を沢山作っておきましょう」と。母や姉との確執で、10年も耐えたフローは、待つことに慣れていたのです。

クリミア半島での戦闘が激しくなって(セヴァストポリ要塞の攻防戦)大量の負傷者が出たこと、戦地の不衛生から多数のコレラ患者が発生したことなどで、200人を超える傷病兵がスクターリに移送されてきたことによって、状況は変わりました。人手が足りなくなった軍医と司令官は、フローたちの手を借りざるを得なくなったのです。38人の看護士たちは、フローの慧眼に感心し、この



傷病兵を見舞い、様子を聞くフロー・レンス
「ランプの天使」の呼称は、ここから生まれた
(1855年1月)

指揮官についていく覚悟を決める副産物もありました。看護を始めると、ベッドやシーツの不足はもちろん、消毒薬や包帯まで、必需品の不足が目立ちました。下層階級の兵士の待遇に関心を示さない軍幹部や軍医たちとの折衝に、フローは日夜駆け回らざるをえない日々が続きました。看護師たちや下働きの婦人たちに的確な指示を出し、自らも看護の現場に立ちながら、何事も前例にこだわってフローの提言を認めようとしない、軍幹部との折衝は大きな負担だったのです。そんなフローにとって、日々の日課になった1日の最後の仕事が、深夜にランプをもって傷病兵の様子を見て回ることでした。有名になった「ランプの天使」「ランプを持ったレディ」の呼称は、ここから生まれたのです。(続く)

第14回史跡見学バスハイクご報告

4月18日(木)、雨が心配される中、総員35名の参加を得て、佐倉の国立歴史民俗博物館と円応寺、白井城址への史跡見学に行ってきました。

定刻8時に新百合ヶ丘を出発、渋滞に巻き込まれて50分遅れで歴史民俗博物館に到着。常設展を見学しました。原始・古代から、現代まで、民俗の部屋を含めて全6室。その広いこと広いこと。1室を丁寧に見ていると、とても2時間の見学では、見切れないほどの広さがあり、各自興味のある部屋中心の見学になりました。撮影禁止のため、写真はなし。



一幸ゆうかりが丘店での食事風景

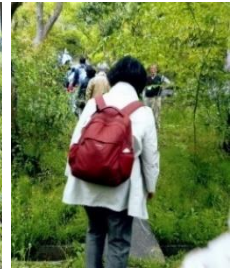
見学後昼食会場へ。和食のランチを楽しみました。午後は白井八景八ヶ寺巡り実行委員会の皆様にご案内いただき、阿多津の墓、円応寺を見学、円応寺に白井義胤翁が整備された白井家の墓地も見学。お寺から山道を伝って、白井城址に登り、高いところから白井の町並みと印旛沼の景観を堪能して帰路につきました。帰路は渋滞もなく順調で、午後6時丁度くらいに到着しました。新より到着と同時に雨模様に、まさに滑り込みセーフでした。



駐車場すぐ前の阿多津の墓と碑
現地森会長にお話し
いただきました



義胤翁が整備した円応寺
境内の白井家墓地



円応寺から白井城
址に向かう山道

柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日 : 6月1・15・22・29日(土曜日) 7月7・14・21・28日(日曜日)
◎開館時間: 午前10時~午後3時

第92回カルチャーセミナー

教育の歩み その1 ~学校誕生への道~

講師 小林基男氏 (柿生郷土史料館専門委員)
日時 6月22日(土) 13時30分~15時30分
会場 柿生郷土史料館(柿生中学校内)特別展示室
参加費 無料 どなたでも参加できます。



おばさん学校と揶揄された
ロンドンの私設学校
(イギリス1840年頃)

私も皆様も、「学校」と聞くと、同年齢の集団で学級を構成し、同年齢の仲間と共に学ぶ世界を思い描くと思います。自分もそうだったし、兄弟姉妹は勿論、両親や祖父母もまた同じような学びを体験してきたようなのですから、こうした認識が固定観念になって当然と言えます。

ですが、教育の歩みを振り返ってみると、同一年齢で学級を構成し、その学級を年齢毎に学年として分けるという教育方法は、登場してからまだ200年に満たない過去しか持っていません。

教育の場として「学校」が登場した当時は、教場はあっても、学級や教室はなかったのです。勉強の進み具合も、年齢もマチマチの子どもたちが、一緒に勉強していたのです。いったいどのような変遷を経て、現在のよう姿になったのか。皆様もご一緒に考えてゆきませんか。



田舎教師の授業風景
(フランス1830年代)

第22回特別企画展

祝川崎市制誕生百年!

写真で辿る川崎市の百年

1939年の川崎市誕生から現在までの川崎市変貌の様子を、現在までに蓄積された膨大な写真から、史料館の委員たちの目で選んで、皆様に見ていただく企画展です。

期間 2024年6月15日(土)~10月26日(土) 会場 柿生郷土史料館特別展示室